

# 近代日本の日蓮信仰にみる祈り

——牧口常三郎の場合——

## 三 輪 是 法

(身延山大学)

### はじめに

近代日本の宗教界において、日蓮の立正安国の思想は、国家安泰を指標とする政治的右派・左派の双方に取り込まれ、利用されたことは周知の通りである。戸頃重基氏の研究、『近代社会と日蓮主義』<sup>(1)</sup>によれば、日蓮主義の開闢統一の思想は、近代社会において自由、寛容とはつながらず、天皇制による絶対主義統一の思想と癒着し、ミリタントな全体主義に接合したということである。ここで戸頃氏が定義する「日蓮主義」とは、「法華経に基づく日蓮の思想・信仰・行動の体系」ということで、田中智学の国柱会、顕本法華宗の本田日生、身延系日蓮宗の外郭的文化団体である法華会の小林一郎、そして宗教学者姉崎正治などによって普及したという。物語論に換言すれば、日蓮の遺文が近代日本において、信仰者の行動を意味づけるために読まれたということ、戸頃氏が言う「日蓮主義」信仰者達は、日本という国家、民族主義まで包括した国体を守るという「願い」<sup>(2)</sup>のために、自らの思想と行動の正当性の証明を日蓮の思想と行動に見出し、求めたということになるであろう。果たして、戦後の現代社会から翻ってみるときに、

そうした行動が正しかったかどうかは問題となるところであるが、日蓮主義が近代日本において一部の国家主義や社会主義の人々のメルクマールになっていたことは事実として認められるところである。

本発表では、自らの信仰的立場を「日蓮主義」と呼ぶことはなかったが、戸頃氏が定義する日蓮主義に基づいて教育改革を提唱し続けた、現在の創価学会の前身、創価教育学会の創始者牧口常三郎にスポットを当て、彼の願いについて確認していきたい。

### 一 三谷素啓の願い

牧口が日蓮正宗に入信したのは昭和三年（一九二八）、五七歳の時で、きっかけとなったのは当時の研心学園、現在の日白学園で校長を務めていた三谷素啓との出会いであった。三谷については詳細を知ることができないが、由木義文氏の論文によると、明治十一年（一八七八）に長崎県に生まれ、大正四・五年（一九一五・六）、四〇歳近い年齢で禅宗の檀徒から日蓮正宗に改宗している。著書として昭和四年（一九二九）十一月発行の『立正安国論精釈』（以下『精釈』と略す）があるが、その冒頭に寄稿されている研心学園創始者・佐藤重遠の「発刊之辞」には次のように説かれている。

吾人、茲に親しく經典を色読し、仏教の意義を闡明するの傍、正法有縁の同胞に対し、汎く聖祖の遺徳を頌えんがために、先生を擁して聖書刊行の大業を発願し、其初著として時機必須なる立正安国論の精釈を乞ひ、更に進んで順次御書全巻に及ばんと欲す。

これによれば、三谷とともに法華経に基づいた実践活動をし、仏教の本意を明確にしながら、同じ信仰を持つ者達

に日蓮遺文の注釈書を順に刊行していくその始めとして、時代にふさわしい『立正安国論』の注釈を願ったということである。そしてその目的は、同文に説かれる佐藤の時代観に克明に記されている。

而かも仏祖は遠く滅して印度亡び、孔孟漢土に出づと雖も三世を知らず十界を語らず、現世に執着して教義悉く眼前に拘泥し、延て世上の規範を壊り、破綻続出、四百余州為に寧日無し、耶教は偏狭依怙にして余弊の斉す処往年の大惨劇を演出し、漫に人類を軽賤して人種問題は現に不断の禍根を為す、独り我日本帝国のみ冥天の救護する処にして、地涌の出現は仏教に叶ひ、連綿として正法涌泉の実状にあり、国体の精華燦然として古今に絶し万邦に超ゆ、所謂東北有小国唯有大乘種性の聖語に符契を合し、王法は仏法に冥し、仏法は王法に合し王仏冥合して理想の国土を建設すべきの冥約に当る。苟も此大法に依拠せんか、百千の大難何かあらん、転禍為福、変毒為藥、我が国現下の思想国難の如きは一举にして救治すべきなり。<sup>(5)</sup>

すなわち、日蓮遺文に引用される僧肇の『法華翻經後記』の予言に基づき、王仏冥合して理想の国土を建設し、逼迫した日本の悪しき現状を打破すべきであることが述べられるのである。

それでは、三谷自身はどう考えていたのだろうか。

『精釈』の「追記」には次のように説かれている。

偶々今夏期休暇を迎へた際、同氏等の余に語る処は、休暇を利用して、世上難解の定評あり、且つ未だ正義幽遠の合理を闡明せるものなき、立正安国論の精註を刊行して、濁劫悪世の現社会に投擲することは、一は喘息せる憂国同胞の奮起を促し、他は以て三毒惰眠の一叱に値せずやとの薦に接した。<sup>(6)</sup>

当時の社会については「濁劫悪世」と認識し、『精釈』出版の目的を憂国同胞の奮起と当時社会に対する叱責とし

ている。社会の現状を「濁劫惡世」とする具体的説示は本書の中随所に説かれており、その内容は科学偏重の生死観、地震や天体にみられる奇瑞の表出、僧侶の墮落、児童教育の退廃、批評家の愚見、科学的真理のいい加減さ、人倫の喪失などに至っている。こうした現状の原因については、『立正安国論』の「早く天下の静謐を思はば須く国中の謗法を断つのみ」の文を受けて次のように解説する。

仏法の最要は、成仏得道にある。成仏とは、三世常住の義である。然らば、現世安穩後世善処（マツ）で無くてはならぬ。斯の如き天下地上の災妖は、現世に於て已に三惡道の実現である。見よ、人心の惡化を。人は悉く惡鬼醜魔の心である。外形は人間であつても、心が已に人で無い。人間の価値は外貌の醜美に依つては別れない。心の善惡に依つて定まるのだ。（中略）凡そ、恐怖すべき者は無数である。戦争、地震、海嘯、火事、水害、疫病等、此外幾多も有るが、それ等の者は悉く括て一丸と為すも、尚ほ及ばざる一大恐怖がある。其れは人心の惡化である。

（中略）近時の惡思想。大なる点より見て、果して惡思想か、善思想かは、今之を論ずるの機を持たぬから、抄略するが要するに我日本には、我日本特有の思想があり、習慣があつて、兎に角二千年余の歴史を重ねて來たのであるが、人皆磐石と心得て居つた日本特有の思想も、何ふやら余程浸滲されて來たらしい、（中略）世人は何も知らずして、各自の想像で種々に推測を画いて居て、赤化思想の人なんと云へば、如何にも鬼か惡魔に似た人許りだと思つて居るらしいが、實際は雲泥の違だ。誠に懷かしく、慕はしく、深切で物やさしくて、情深くて、虚言を言はない点など、全く想像の外だ。併し之れが最も恐るべき勢力を扶殖する所以なのだ。恰も少女を誘拐するときに、物やさしく、深切にすると同じ口口である。（中略）恐るべきは惡人よりも善人である。戒むべきは在家よりも出家である。<sup>（7）</sup>

現社会が悪化しているのは、人の心が悪くなっているからであり、マルキシズムのような外来思想に浸食されて人々は踊らされている。その元凶こそが善人や出家者だとするのである。

三谷は当時起こった自然災害や人災の原因を憂い、謗法滅罪を説く『立正安国論』の教説に深く感応し、そこに同時代性を見出した。そして間接的ではあれ、「本書の外に日蓮聖人御書四卷を加へ、合計五卷を發行する」<sup>(8)</sup>ことで、当時社会に対して叱責し、憂国同胞の奮起を願ったのである。

## 二 牧口常三郎の願い

牧口が日蓮正宗に入信したきっかけが三谷との出会いであることは先述したが、牧口が三谷から受けた影響は、法華經の真理が我々の日常生活に密接に関係し、全宇宙の道理として認識されている点である。三谷の『精釈』では、医学の進歩について批判をあげるなかで、次のように述べられている。

（前略）要するに我々に限らず、宇宙間に生存して居るものが、個々単独に生活して居ると見るのが、現代科学の主張であるが、之れが根本の誤謬で有つて、真実には一大生活圏内の分派生活に過ぎない。譬へて云へば、我々の毛髪は、一本一本の生活と見える。爪も然り、更に微細に進めば、血液も各々微粒の血珠が各自単独の生活であり、更に進んでは、細胞が各個の生活を営んで居るのではあるが、詮じ詰めれば、吾々一個の色（体）心生活中の一分派生活に外ならない。更に、吾々は宇宙の一小分派生活である。之より推理するならば、此の宇宙たる三千大千世界は、一個の生活体で有る事に異論は無からう。若し然らば、天体の生活が我々地上の生活と、没交渉である道理は断じて無い。經文は、科学的に於ても、此の理論が徹底して居る。何一つとして實際と

相違する処が無い。<sup>(9)</sup>

三谷は諸現象を証明する科学の限界において、仏教經典、殊に法華經の經文の道理を全宇宙の道理とする。牧口も同様に現実の生活と仏教との関係を見出していくわけだが、三谷とは異なり、科学を否定せず、「日蓮仏法をこゝろみるに道理と証文とはすぎず。又道理・証文よりも現証にはすぎず」という日蓮の言葉をもって、宗教と科学を結びつけて考えるのである。それでは、牧口が当時日本において問題としていたことは何であらうか。

昭和五年に発刊された『創価教育学大系』第一巻冒頭の「緒言」には次のように述べられている。

けれども一日も早く社会の一顧を得て、国民教育の不安を救ひたいといふ情だけは益々濃厚に赫熱して来たのである。入学難、試験地獄、就職難等で一千万の児童や生徒が修羅の巷に喘いで居る現代の悩みを、次代に超越させたくないと思ふと、心は狂せんばかりで、区々たる毀譽褒貶の如きは余の眼中にはない。希くば物の良否、価値の多少は兎も角も、三十余年間の苦心を諒察せられ、同情ある叱正を切望する次第である。（中略）もしも幸に共鳴されるならば、相提携して叙上教育の改造によって、国難の救済に翼賛せんと期するものである。<sup>(10)</sup>

当時の教育社会に見られる受験の弊害、就職困難な状況を憂い、「教育改造運動」を起すことを宣言している。<sup>(11)</sup>では、牧口が分析し、提唱する教育の目的はいかなるものであろうか。

現在までの教育には不確実なる目的をあたかも確実なるものゝ如くに誤認して来た大なる誤謬がある。国民教育の膨大な組織が出来上がって居ながら、その目的観が不確実であった事は何としても不可思議の現象である。今や吾人はこの問題を明確に究明し認識しなければならない。それには社会が如何なる目標を以て子弟を教養せんと念願して居るかを静視する事が肝要である。それには少なくとも二つの方面があると考へる。之は家庭に於て

父母は其の子に対して如何なる希望を持つて居るか。また国家社会は其の次代の要素に如何なることを要求して居るか。此二つについて事実を観察し検討することである。

或る論者は国家の為と云ひ、また或者は父母の為といふ。然しそれは果して子供を愛する父母の純真率直なる希望であるであらうか。(中略) 社会が要求する目的は同時に個人が伸びんとする目的と一致せねばならぬ。即ち真正の目的は一方が他方を手段とする事なく、一方の生存目的は他方に於ても当然として受け入れられるものでなくてはならぬ。

即ち国民あつての国家であり、個人あつての社会である。個人の伸長発展は體て国家社会の繁榮であり、充実にあり、拡張であり、これに反して個人の縮小は即ち国家の衰微であり、勢力の減退である。国家社会は原素の結合に依つて榮え、分離によつて衰へ、解散によつて消滅するものである。<sup>(12)</sup>

教育の目的には子供に対する親の希望を叶えることと、国家が必要とする人材の育成の二つにあることを述べ、この二つの目的が別々に達成されるのではなく、前者の達成、すなわち個としての人間育成が、やがて後者の目的たる国家を形成し、国家社会を繁榮へと導くという理論に基づいて、その双方を一体とする射程を組み込んだ教育が必要だと説くのである。

これを価値論に即して言うならば、「利用厚生が個人我を超越して、社会我に拡大され「願くば此の功德を以て普く一切に施し、我等と衆生と俱に仏道を成就せんことを」の境界に至るなら、何も嫌忌するところがないのみか、論者の期待する「真理其の物を求むる無我の聖者にして大なる発明発見をするもの」と一致する訳ではないか<sup>(13)</sup>」と牧口が述べる、法華經化城喻品に宣言される仏の祈りとも相通するものとなる。そしてその結果、我々は幸福を実現す

る。

教育の目的たるべき文化生活的の円満なる遂行を、如実に言ひ表はす語は幸福以外にはないであらう。（中略）教育者や教育を希望する父兄などが、自己の生活の慾望の為に、被教育者を手段とするのでなく、被教育者それ自身の生活を教育活動の対象となし、その幸福を図るを以て、教育の目的とするのである。<sup>(14)</sup>

自己の欲望のためではなく、子供を教育し、幸福へと導くことが教育の目的であり、ひいてはその実現こそが全ての人々を幸福に至らしめるというのである。

では牧口がいう幸福とは何か。

従つて真の幸福は、社会の一員として公衆と苦楽を共するのでなければ得る能ざるものであり、真の幸福の概念の中には、どうしても円満なる社会生活といふことが欠くべからざる要素をなすことが容易に承認されよう。<sup>(15)</sup>

真の幸福とは法華經に説かれるように、一切衆生の幸福、社会全体の幸福であり、その内容は、「宗教家の生活、真に社会改造を唯一無二の念願とする志士の生活、教育に没頭する真正の教育家の生活等は財産はないが、無限の欣悦に浸り、無限の英気に培はれ、依つて以て安心立命し、虚心純潔にして小児の如き天真無限の幸福を感じる」というように、物質的欲求を満たすものではなく、精神的なものである。換言すると、地位や名誉、財産といったものではなく、精神的ゆとりの境地なのである。

そしてこの幸福という目的を達成するための主要な要素、大前提となるのが、健康であり、青少年の不健康な生活は、怠惰・無活動であることが指摘され、創価的生活を営むことが推進されている。

幸福の第一条件たる健康の爲めには活動を第一とする。社会的生活に有害なる怠惰、無活動は個人的不健康の原

因であり、無駄な生活、反価値の活動に放散されて居る自動の活動力じつとして居られない青少年の活動力の有害に放散されるものを有益に、創価的生活に導く為に教育の意義が存するのである。<sup>(17)</sup>

このようにして、牧口は教育改革の綿密な理論を展開していくわけであるが、教育目的に個人と社会の双方の領域を認めている以上、自ずとその理論は社会改革へも向けられることになる。前二巻に続けて昭和七年に発刊された『創価教育学大系』第三巻では、教育の領域から国家へと問題意識を拡大し、理論を展開している。

階級闘争、生活困難、思想混乱、世相險惡等々。之は現に吾等の眼前に展開して居る場面で、如何にしてこの大波瀾を乗り切るか、焦眉の問題ではないか。<sup>(18)</sup>

牧口はこの問題について、日蓮の『立正安国論』冒頭部分を三谷の『精釈』から間接引用し、「誰か是を現代に係なしと看過し得るか。殊に思想善導に任ずる者は如何」<sup>(19)</sup>と疑問を投げかけ、学者・政治家・宗教家の無能さを指摘し、教育家に言い及ぶ。ここでの中心的課題は、思想善導問題の解決である。しかしこの問題には大きな障壁があるという。それが「指導の目標たる善惡其の物の明確なる認識」<sup>(20)</sup>の欠如である。したがって、障壁を乗り越えるために善惡の判定基準が必要となり、「倫理学と社会学の討究」<sup>(21)</sup>を基盤とする、牧口の提唱する創価教育が重要な役割を持つようになるのである。

如何なる教育をすればよいかは第二として、教育に依るにあらざれば、此の危険思想も思想国難も善導することの、差し当り出来ないだけは、何人も異論の余地はない所であらう。(中略)思想の善導は教育の改善によつてするより外に途なきものたるだけは承認せねばならぬ。<sup>(22)</sup>

牧口は当時日本の思想混乱を国難と認め、その改善策として教育改革を提唱する。ではその思想とは何か。

政治家や経世家は「社会心養成にあり」で擱筆してもよからう。教育家は如何。今までの教育指導階級は国体觀念の涵養にあり、道徳教育の振興にありで教育の実績が<sup>あが</sup>挙げると考へて居た。而して「如何にしたら国体觀念が涵養されるか」「如何にしたら道徳教育が振興されるか」に迄は考へ及ばずとも、教育家が何とかするであろうとして居た。然るを何ぞ知らん、幾年経つても其の方法は案出されず、其の人さへも見つからず。現在の行詰りを<sup>きた</sup>来したではないか。（中略）教育家は然らばその後を如何にすべきか。斯様に鼓吹は大であるに拘はらず「何故に国体觀念が涵養されぬのか、何故に道徳教育が振興しないのか」との点を反省し、真面目に前途の方策を講ぜねばなるまい。<sup>(23)</sup>

明治二三年（一八九〇）に發布された教育勅語は、天皇制教育を推進するものであったが、牧口はこの教育に疑問を投げかけている。牧口自身が述べるところでは、だからといって決して左翼的思想を持っているのではなく、すでに左翼活動とは決別をした上での問題提起である。そしてその解決策として次のように結論づける。

此（世界唯一の国体として発達して来た我が国に理想郷が実現する）欲求を裏切る現実社会の醜惡が精神上の欠陥に起因すること前陳の如しとすれば、之が救済は教育によつて為されなければならぬ。教育も終局に於ては最高なる宗教の力に基づかねばならぬであらうが、併し昔思想善導を一手に引き受けて居た僧侶乃至宗教家が殆ど信用を失墜して、活社会と絶縁した今日では、教育のみによる外には具案の方策は立たないであらう。<sup>(24)</sup>

こうして牧口は教育という科学と宗教を一体とする考えを一度は放棄し、創価教育を実践していく上で理想とする教師論を展開していく。

教師の理想的資格を論ずるに当たつての前提は、教師は人間の師表<sup>しへう</sup>として社会の尊敬を受けるに相應するだけの

資格を備ふるにあらざれば動まらない職業であると言ふことの意識である。(中略)然らば相当資格とは何ぞ。

自ら人が尊敬する様統一された人格である。<sup>(25)</sup>

牧口教育論の特徴は、学者や政治家からトップダウンで伝えられた理念に基づく実践ではなく、あくまでもボトムアップの現場主義であり、自らの経験に基づいて考え抜かれた実践論である。その実践論に従って、現行の教育界、教師を「永不成仏」「二乗不作仏」と批判する。更に教師の改善策として、法華經の良薬、日蓮の教えの必要性を説くに至る。<sup>(26)</sup>

以上のように、『創価教育学体系』に展開される牧口の教育改革論は、学問的に見ても説得力を持つものであったように思う。しかしやがて、法華經・日蓮(日蓮正宗)への信仰が深まるにつれ、『創価教育学大系』で断念した「教育も終局に於ては最高なる宗教の力に基づかねばならぬ」<sup>(27)</sup>という、宗教を基礎とした教育論を言及するようになり、昭和一二年(一九三七)に発表された『創価教育法の科学的超宗教的実験証明』では、法華經、日蓮の教説の援用が顕著になってくる。紙面の都合上、詳細に触れることが出来ないが、「教育法の根本的改革問題」のなかで、教育者はまず宗教改革を断行しなければならないということが説かれ、さらに教師の選択条件では、「法華經寿量品の肝心「南無妙法蓮華經」の三大秘法を信じ奉るだけの純真さを有する、正しい性格」<sup>(28)</sup>をあげるに至る。こうして牧口の教育改革論は最終段階を迎えるのである。

## 小 結

牧口常三郎は、当時の日本国家の状況を憂い、改革することを主眼として、教育者の立場で幸福を願い、達成しよ

うとしたことが理解できる。その願いは『創価教育学大系』として具現し、その祈りはただ祈りとして終わることなく、教育改革運動として実践されていったのである。日蓮の思想と行動は、牧口自らの思想と行動を相乗的に意味づけ、彼の背を強く押しながら、創価教育学会を推進させていったということであろう。

近代日本における日蓮思想の受容の一特徴として指摘できることは、祈りを祈りとして終わらせることなく、日蓮の生き方と相似して実現化の道を選択していくところにある。

# 註

- (1) 戸頃重基著『近代社会と日蓮主義』（昭和四七年、評論社）一五―三六頁。
- (2) 今大会のテーマは「仏教における祈りの問題」である。「祈り」は通常神仏という絶対者に捧げるものであり、根幹には実現されていない人間の願いが存在している。本稿では、近代日本における願いに重点を置いて取り上げている。
- (3) 由木義文「三谷素啓の立場、牧口常三郎の立場―特に仏法と科学の係わりを通して」（渡邊寶陽先生古稀記念論文集『日蓮教学教団史論叢』二〇〇三年、平楽寺書店）六五七―八頁参照。
- (4) 三谷素啓『立正安国論精釈』（二〇〇三年、興門資料刊行会 以下『精釈』と略す）「発刊之辞」四頁。
- (5) 右同二―三頁。
- (6) 右同書「追記」二頁。
- (7) 右同書三六九―三七〇頁。
- (8) 右同書「追記」四頁。
- (9) 右同書一〇一頁。
- (10) 『牧口常三郎全集』（一九八二年、第三文明社 以下『全集』と略す）第五卷、八―一〇頁。
- (11) 同書の補注（四一七頁）によると、明治二六年から昭和一五年の間、数万人の受験浪人があり、受験失敗者の自殺が相次いだということである。
- (12) 『全集』第五卷、一一三―四頁。

- (13) 右同書、二三一頁。
- (14) 右同書、一二四頁。
- (15) 右同書、一三一頁。
- (16) 右同書、一三三頁。
- (17) 右同書、一四〇頁。
- (18) 『全集』第六卷、一五頁。
- (19) 右同書、一七頁。
- (20) 右同書、一九頁。
- (21) 右同書、二〇頁。
- (22) 右同書、二〇―一頁。
- (23) 右同書、二一―二頁。
- (24) 右同書、三五頁。括弧内筆者。
- (25) 右同書、七一―二頁。
- (26) 右同書、「第三章第二節 教員氣質とその階級」(六〇―七一頁) 参照。
- (27) 右同書、三五頁。
- (28) 『全集』第八卷、三九頁。

